

第 9 章

ファイバー束

二つの C^∞ 多様体 B, N が与えられたとしよう. B を**底空間**, F を**ファイバー**と呼ぶことにする. このとき, 大雑把に言うと, **局所的に積多様体**^{*1} $B \times F$ と同一視される C^∞ 多様体 E のことを **F をファイバーとする B 上のファイバー束**と呼ぶ. もう少し真面目に言うと, M のチャート (U_i, φ) をとってきたときに積多様体

$$U_i \times F \tag{9.0.1}$$

と E の開集合との間に微分同相写像が存在することである.

しかし, これだけだと E の**大域的な幾何構造**が見えてこない. 情報の欠落をなんとかするには M の開被覆 $\{U_i\}$ に関して局所的な積多様体 (9.0.1) の構造を張り合わせる必要がある. そのために, 我々は全ての $U_i \cap U_j \neq \emptyset$ 上において, **変換関数** $\{\Phi_{ij}\}$ を

$$\Phi_{ij}: F|_{U_i} \rightarrow F|_{U_j}$$

として用意する. 変換関数の構成の如何によっては, ファイバー束 E の大域的な幾何構造は極めて複雑なものになりうる.

これだけだとよくわからないので, まず手始めに S^1 を底空間とするファイバー束を具体的に構成してみよう. 1次元実多様体 S^1 の C^∞ アトラス $\{(U_+, \varphi_+), (U_-, \varphi_-)\}$ を次のようにとる:

$$\begin{aligned} U_+ &:= \{e^{i\theta} \mid \theta \in (-\varepsilon, \pi + \varepsilon)\}, & \varphi_+ : U_+ &\rightarrow \mathbb{R}, e^{i\theta} \mapsto \theta \\ U_- &:= \{e^{i\theta} \mid \theta \in (\pi - \varepsilon, 2\pi + \varepsilon)\}, & \varphi_- : U_- &\rightarrow \mathbb{R}, e^{i\theta} \mapsto \theta \end{aligned}$$

ファイバー F としては 1次元実多様体

$$F := [-1, 1] \subset \mathbb{R}$$

を選ぶ. このときファイバー束 E は積多様体 $U_+ \times F$ および $U_- \times F$ の二部分からなり, それぞれチャート

$$(U_+; \theta, t_+), \quad (U_-; \theta, t_-)$$

を持つ (当然だが $t_\pm \in [-1, 1]$ である). なお, この時点では $U_+ \times F, U_- \times F$ の「つながり方」は未定義である.

^{*1} 位相は積位相 (定義??) を入れるのだった.

ところで, S^1 の開被覆 U_+ , U_- は 2 ヶ所で重なっている:

$$\varphi_{\pm}(U_+ \cap U_-) = (-\varepsilon, 0] \cup [2\pi, 2\pi + \varepsilon) \cup (\pi - \varepsilon, \pi + \varepsilon)$$

ここで, 変換関数を

$$\Phi_{+-}: F|_{U_-} \rightarrow F|_{U_+}, \begin{cases} t_+ = t_- & : \theta \in (-\varepsilon, 0] \cup [2\pi, 2\pi + \varepsilon) \\ t_+ = t_- & : \theta \in (\pi - \varepsilon, \pi + \varepsilon) \end{cases}$$

と定義することでファイバー束 E は円筒と同相に,

$$\Phi_{+-}: F|_{U_-} \rightarrow F|_{U_+}, \begin{cases} t_+ = t_- & : \theta \in (-\varepsilon, 0] \cup [2\pi, 2\pi + \varepsilon) \\ t_+ = -t_- & : \theta \in (\pi - \varepsilon, \pi + \varepsilon) \end{cases}$$

と定義することでファイバー束 E は Möbius の帯と同相になる. 前者は特に $E \approx S^2 \times F$ ということだが, このような状況を指してファイバー束 E は自明束であると表現する.

9.1 定義の精密化

ファイバー束のイメージが掴めたところで, 数学的に厳密な定義を与える. まずは変換関数を入れる前の段階までの定式化である:

C^∞ 多様体 M の微分同相群 (diffeomorphism group) $\mathbf{Diff} M$ とは,

- 台集合 $\mathbf{Diff} M := \{ f: M \rightarrow M \mid \text{微分同相写像} \}$
- 単位元を恒等写像
- 積を写像の合成

として構成される群のことを言う.

定義 9.1: Lie 群の作用

- Lie 群 G の C^∞ 多様体 M への左作用とは, 群準同型 $\rho: G \rightarrow \mathbf{Diff} M$ であって写像

$$\blacktriangleright: G \times M \rightarrow M, (g, x) \mapsto \rho(g)(x)$$

が C^∞ 写像となるようなもののこと. $g \blacktriangleright x := \blacktriangleright(g, x)$ と略記する.

- Lie 群 G の C^∞ 多様体 M への右作用とは, 群準同型 $\rho: G^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Diff} M$ であって写像

$$\blacktriangleleft: M \times G \rightarrow M, (x, g) \mapsto \rho(g)(x)$$

が C^∞ 写像となるようなもののこと. $x \blacktriangleleft g := \blacktriangleleft(g, x)$ と略記する.

- Lie 群の左 (resp. 右) 作用が自由 (free) であるとは, $\forall x \in X, \forall g \in G \setminus \{1_G\}, g \blacktriangleright x \neq x$ (resp. $x \blacktriangleleft g \neq x$) を満たすことを言う.
- Lie 群の左 (resp. 右) 作用が効果的 (effective) であるとは, $\rho: G \rightarrow \mathbf{Diff} M$ (resp. $\rho: G^{\text{op}} \rightarrow \mathbf{Diff} M$) が単射であることを言う.

定義 9.2: C^∞ ファイバー束

Lie 群 G が C^∞ 多様体 F に効果的に作用しているとする. C^∞ ファイバー束 (fiber bundle) とは,

- C^∞ 多様体 E, B, F
- C^∞ の全射 $\pi: E \rightarrow B$
- Lie 群 G と, G の F への左作用 $\blacktriangleright: G \times F \rightarrow F$
- B の開被覆 $\{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$
- 微分同相写像の族

$$\{\varphi_\lambda: \pi^{-1}(U_\lambda) \rightarrow U_\lambda \times F\}_{\lambda \in \Lambda}$$

であって, $\forall \lambda \in \Lambda$ に対して図 9.1 を可換にするもの.

$$\begin{array}{ccc} \pi^{-1}(U_\lambda) & \xrightarrow{\varphi} & U_\lambda \times F \\ \pi \downarrow & \swarrow \text{proj}_1 & \\ U_\lambda & & \end{array}$$

図 9.1: 局所自明性

- C^∞ 写像の族

$$\{t_{\alpha\beta}: B \rightarrow G \mid \forall (p, f) \in (U_\alpha \cap U_\beta) \times F, \varphi_\beta^{-1}(p, f) = \varphi_\alpha^{-1}(p, t_{\alpha\beta}(p) \blacktriangleright f)\}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$$

の 6 つのデータの組みのこと. 記号としては (E, π, B, F) や $F \hookrightarrow E \xrightarrow{\pi} B$ と書く.

以下ではファイバー束と言ったら C^∞ ファイバー束のことを指すようにする. ファイバー束 (E, π, B, F) に関して,

- E を全空間 (total space)
- B を底空間 (base space)
- F をファイバー (fiber)
- π を射影 (projection)
- φ_λ を局所自明化 (local trivialization)
- $t_{\alpha\beta}$ を変換関数 (transition map)

と呼ぶ*2. また, 射影 π による 1 点集合 $\{b\}$ の逆像 $\pi^{-1}(\{b\}) \subset E$ のことを点 b のファイバー (fiber) と呼び, E_b と書く.

9.2 ベクトル束

*2 紛らわしくないとき, ファイバー束 (E, π, B, F) のことを $\pi: E \rightarrow B$, または単に E と略記することがある.

定義 9.3: ベクトル束

ファイバーを n 次元 \mathbb{K} -ベクトル空間 V とし、構造群を $\mathrm{GL}(n, \mathbb{K})$ とするような **ファイバー束** $V \hookrightarrow E \xrightarrow{\pi} M$ であって、その局所自明化 $\{\varphi_\lambda: \pi^{-1}(U_\lambda) \rightarrow U_\lambda \times V\}_{\lambda \in \Lambda}$ が以下の条件を満たすもののことを**階数 n のベクトル束** (vector bundle of rank n) と呼ぶ:

(vect-1)

$\forall \lambda \in \Lambda$ および $\forall x \in U_\lambda$ に対して、 $\mathrm{proj}_2 \circ \varphi_\lambda|_{\pi^{-1}(\{x\})}: \pi^{-1}(\{x\}) \rightarrow V$ は \mathbb{K} -ベクトル空間の同型写像である。

ここで、第3章で雑に導入した接束を正確に構成しよう。

【例 9.2.1】接束

n 次元 C^∞ 多様体 M の接束は、構造群を $\mathrm{GL}(n, \mathbb{R})$ とするベクトル束 $\mathbb{R}^n \hookrightarrow TM \xrightarrow{\pi} M$ である。実際、 M のチャート $(U_\lambda, (x^\mu))$ に対して局所自明化は

$$\varphi_\lambda: \pi^{-1}(U_\lambda) \rightarrow U_\lambda \times \mathbb{R}^n, \left(p, v^\mu \frac{\partial}{\partial x^\mu} \Big|_p \right) \mapsto \left(p, \begin{bmatrix} v^1 \\ \vdots \\ v^n \end{bmatrix} \right)$$

となり、チャート $(U_\alpha, (x^\mu)), (U_\beta, (y^\mu))$ に対して

$$\varphi_\beta^{-1}(p, (v^1, \dots, v^n)) = \varphi_\alpha^{-1}\left(p, \begin{bmatrix} \frac{\partial x^1}{\partial y^1}(p) & \cdots & \frac{\partial x^1}{\partial y^n}(p) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \frac{\partial x^n}{\partial y^1}(p) & \cdots & \frac{\partial x^n}{\partial y^n}(p) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} v^1 \\ \vdots \\ v^n \end{bmatrix} \right)$$

となる。故に変換関数は

$$t_{\alpha\beta}(p) := \begin{bmatrix} \frac{\partial x^1}{\partial y^1}(p) & \cdots & \frac{\partial x^1}{\partial y^n}(p) \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \frac{\partial x^n}{\partial y^1}(p) & \cdots & \frac{\partial x^n}{\partial y^n}(p) \end{bmatrix} \in \mathrm{GL}(n, \mathbb{R})$$

で、ファイバーへの構造群の左作用とはただ単に n 次元の数ベクトルに行列を左から掛けることである。

9.3 束写像と C^∞ 切断

定義 9.4: 束写像

ファイバー F と構造群 G を共有する二つのファイバー束 $\xi_i = (E_i, \pi_i, B_i, F)$ を与える。

- ξ_1 から ξ_2 への**束写像** (bundle map) とは、二つの C^∞ 写像 $f: B_1 \rightarrow B_2$, $\tilde{f}: E_1 \rightarrow E_2$ の組であって図 9.2

$$\begin{array}{ccc}
E_1 & \xrightarrow{\tilde{f}} & E_2 \\
\pi_1 \downarrow & & \downarrow \pi_2 \\
B_1 & \xrightarrow{f} & B_2
\end{array}$$

図 9.2: 束写像

を可換にし、かつ底空間 B_1 の各点 b において、点 b のファイバー $\pi_1^{-1}(\{b\}) \subset E_1$ への \tilde{f} の制限

$$\tilde{f}|_{\pi_1^{-1}(\{b\})}: \pi_1^{-1}(\{b\}) \rightarrow \tilde{f}(\pi_1^{-1}(\{b\})) \subset E_2$$

が微分同相写像になっているものを言う。

- ファイバー束 ξ_1 と ξ_2 が同型 (isomorphic) であるとは、 $B_1 = B_2 = B$ であってかつ $f: B \rightarrow B$ が恒等写像となるような束写像 $\tilde{f}: E_1 \rightarrow E_2$ が存在することを言う。記号としては $\xi_1 \simeq \xi_2$ とかく。

$$\begin{array}{ccc}
E_1 & \xrightarrow{\tilde{f}} & E_2 \\
& \searrow \pi_1 & \swarrow \pi_2 \\
& B &
\end{array}$$

図 9.3: ファイバー束の同型

- 積束 $(B \times F, \text{proj}_1, B, F)$ と同型なファイバー束を自明束 (trivial bundle) と呼ぶ。

ファイバー束 (E, π, B, F) は、射影 π によってファイバー F の情報を失う。 F を復元するためにも、 $s: B \rightarrow E$ なる写像の存在が必要であろう。

定義 9.5: C^∞ 切断

ファイバー束 $\xi = (E, \pi, B, F)$ の C^∞ 切断 (cross section) とは、 C^∞ 写像 $s: B \rightarrow E$ であって $\pi \circ s = \text{id}_B$ となるもののことを言う。

ξ の切断全体の集合を $\Gamma(B, E)$ あるいは $\Gamma(E)$ と書く。

9.4 変換関数によるファイバー束の構成

$\xi = (E, \pi, B, F)$ をファイバー束とする。底空間 B の開被覆 $\{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ をとると、定義 9.2 から、どの $\alpha \in \Lambda$ に対しても局所自明性 (図 9.4a) が成り立つ。ここでもう一つの $\beta \in \Lambda$ をとり、 $U_\alpha \cap U_\beta$ に関して局所自明性の図式を横に並べることで、自明束 $\text{proj}_1: (U_\alpha \cap U_\beta) \times F \rightarrow U_\alpha \cap U_\beta$ の束の自己同型 (図 9.4c) が得られる。

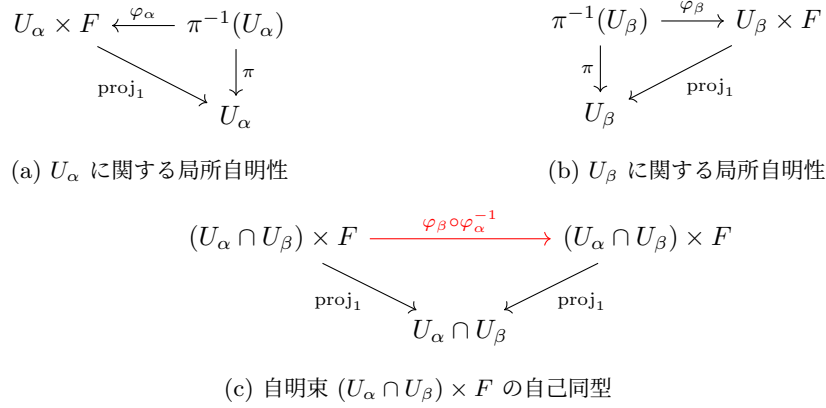


図 9.4: 局所自明性の結合

全ての $U_\alpha \cap U_\beta$ に関する変換関数の族 $\{t_{\alpha\beta}\}$ が $\forall b \in U_\alpha \cap U_\beta \cap U_\gamma$ に対して条件

$$t_{\alpha\beta}(b)t_{\beta\gamma}(b) = t_{\alpha\gamma}(b) \quad (9.4.1)$$

を充たすことは図式 9.4 より明かである。次の命題は、ファイバー束 (E, π, B, F) を構成する「素材」には

- 底空間となる C^∞ 多様体 B
- ファイバーとなる C^∞ 多様体 F
- Lie 群 G と、その F への左作用 $\blacktriangleright: G \times F \longrightarrow F$
- B の開被覆 $\{U_\lambda\}$
- (9.4.1) を充たす C^∞ 写像の族 $\{t_{\alpha\beta}: U_\beta \cap U_\alpha \rightarrow G\}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$

があれば十分であることを主張する：

命題 9.1: ファイバー束の構成

- C^∞ 多様体 B, F
- Lie 群 G と、 G の F への左作用 $\blacktriangleright: G \times F \longrightarrow F$
- B の開被覆 $\{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$
- コサイクル条件 (9.4.1) を充たす C^∞ 関数の族 $\{t_{\alpha\beta}: U_\beta \cap U_\alpha \rightarrow G\}$

を与える。このとき、構造群 G と変換関数 $\{t_{\alpha\beta}\}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$ を持つファイバー束 $\xi = (E, \pi, B, F)$ が存在する。

証明 まず手始めに、cocycle 条件 (9.4.1) より

$$t_{\alpha\alpha}(b)t_{\alpha\alpha}(b) = t_{\alpha\alpha}(b), \quad \forall b \in U_\alpha$$

だから $t_{\alpha\alpha}(b) = 1_G$ であり、また

$$t_{\alpha\beta}(b)t_{\beta\alpha}(b) = t_{\alpha\alpha}(b) = 1_G, \quad \forall b \in U_\alpha \cap U_\beta$$

だから $t_{\beta\alpha}(b) = t_{\alpha\beta}(b)^{-1}$ である.

開被覆 $\{U_\lambda\}$ の添字集合を Λ とする. このとき $\forall \lambda \in \Lambda$ に対して, $U_\lambda \subset B$ には底空間 B からの相対位相を入れ, $U_\lambda \times F$ にはそれと F の位相との積位相を入れることで, 直和位相空間

$$\mathcal{E} := \coprod_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda \times F$$

を作ることができる^{*3}. \mathcal{E} の任意の元は $(\lambda, b, f) \in \Lambda \times U_\lambda \times F$ と書かれる.

さて, \mathcal{E} 上の二項関係 \sim を以下のように定める:

$$(\alpha, b, f) \sim (\beta, b, t_{\alpha\beta}(b) \blacktriangleright f) \quad \forall b \in U_\alpha \cap U_\beta, \forall f \in F$$

\sim が同値関係の公理を充たすことを確認する:

反射律 冒頭の議論から $t_{\alpha\alpha}(b) = 1_G$ なので良い.

対称律 冒頭の議論から $t_{\beta\alpha}(b) = t_{\alpha\beta}(b)^{-1}$ なので,

$$\begin{aligned} (\alpha, b, f) &\sim (\beta, c, h) \\ \implies b &= c \in U_\alpha \cap U_\beta \text{ かつ } f = t_{\alpha\beta}(b) \blacktriangleright h \\ \implies c &= b \in U_\alpha \cap U_\beta \text{ かつ } h = t_{\alpha\beta}(b)^{-1} \blacktriangleright f = t_{\beta\alpha}(b) \blacktriangleright f \\ \implies (\beta, c, h) &\sim (\alpha, b, f). \end{aligned}$$

推移律 cocycle 条件 (9.4.1) より

$$\begin{aligned} (\alpha, b, f) &\sim (\beta, c, h) \text{ かつ } (\beta, c, h) \sim (\gamma, d, k) \\ \implies b &= c \in U_\alpha \cap U_\beta \text{ かつ } c = d \in U_\beta \cap U_\gamma \text{ かつ } f = t_{\alpha\beta}(b) \blacktriangleright h, h = t_{\beta\gamma}(c) \blacktriangleright k \\ \implies b &= d \in U_\alpha \cap U_\beta \cap U_\gamma \text{ かつ } f = (t_{\alpha\beta}(b)t_{\beta\gamma}(b)) \blacktriangleright k = t_{\alpha\gamma}(b) \blacktriangleright k \\ \implies (\alpha, b, f) &\sim (\gamma, d, k). \end{aligned}$$

したがって \sim は同値関係である. \sim による \mathcal{E} の商集合を E と書き, 商写像を $\text{pr}: \mathcal{E} \rightarrow E, (\alpha, b, f) \mapsto [(\alpha, b, f)]$ と書くことにする.

集合 E に商位相を入れて E を位相空間にする. このとき商位相の定義から開集合 $\{\alpha\} \times U_\alpha \times F \subset \mathcal{E}$ は pr によって E の開集合 $\text{pr}(\{\alpha\} \times U_\alpha \times F) \subset E$ に移される. ゆえに E は $\{\text{pr}(\{\alpha\} \times U_\alpha \times V_\beta)\}$ を座標近傍にもつ C^∞ 多様体である (ここに $\{V_\beta\}$ は, C^∞ 多様体 F の座標近傍である).

次に C^∞ の全射 $\pi: E \rightarrow B$ を

$$\pi([(\alpha, b, f)]) := b$$

と定義すると, これは $\forall \alpha \in \Lambda$ に対して微分同相写像^{*4}

$$\varphi_\alpha: \pi^{-1}(U_\alpha) \rightarrow U_\alpha \times F, [(\alpha, b, f)] \mapsto (b, f)$$

による局所自明性を持つ. 従って組 $\xi := (E, \pi, B, F)$ は構造群 G , 局所自明化 $\{\varphi_\alpha\}_{\alpha \in \Lambda}$, 変換関数 $\{t_{\alpha\beta}\}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$ を持つファイバー束になり, 証明が終わる. ■

^{*3} \mathcal{E} はいわば, 「貼り合わせる前の互いにバラバラな素材 (局所自明束 $U_\alpha \times F$)」である. 証明の以降の部分では, これらの「素材」を $U_\alpha \cap U_\beta \neq \emptyset$ の部分に関して「良い性質 (9.4.1) を持った接着剤 $\{t_{\alpha\beta}\}$ 」を用いて「貼り合わせる」操作を, 位相を気にしながら行う.

^{*4} 逆写像は $\varphi_\alpha^{-1}: U_\alpha \times F \rightarrow \pi^{-1}(U_\alpha), (b, f) \mapsto [(\alpha, b, f)]$ である. φ_α も φ_α^{-1} も C^∞ 写像の合成で書けるので C^∞ 写像である.

9.5 主束とその同伴束

この節で導入する**主束の同伴ベクトル束**は、次章でゲージ場を導入する舞台となる。

定義 9.6: 主束

構造群を G に持つ**ファイバー束** $\xi = (P, \pi, M, G)$ が**主束** (principal bundle) であるとは、 G の G 自身への左作用が自然な**左作用**^aであることを言う。

^a つまり、 $g \triangleright x := gx$ (Lie 群の積) である。

次の命題は証明の構成が極めて重要である：

命題 9.2: 主束の全空間への右作用

$\xi = (P, \pi, M, G)$ を**主束**とする。このとき、 G の全空間 P への**自由な右作用**が自然に定義され、その軌道空間 (orbit space) P/G が M になる。

証明 ξ の**局所自明化**を $\{\varphi_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ 、変換関数を $\{t_{\alpha\beta}: U_\alpha \cap U_\beta \rightarrow G\}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$ と書く。 $\forall u \in P, \forall g \in G$ をとる。 $\pi(u) \in U_\alpha$ となる $\alpha \in \Lambda$ を選び、対応する**局所自明化** φ_α による u の像を $\varphi_\alpha(u) =: (p, h) \in U_\alpha \times G$ とおく^{*5}。このとき G の P への右作用 $\triangleleft: P \times G \rightarrow P$ を次のように定義する^{*6}：

$$u \triangleleft g := \varphi_\alpha^{-1}(p, hg) \quad (9.5.1)$$

◀ の well-definedness

$\beta \neq \alpha$ に対しても $\pi(u) \in U_\beta$ であるとする。このとき $\varphi_\beta(u) = (p, h') \in (U_\alpha \cap U_\beta) \times G$ と書けて、また変換関数の定義から

$$h' = t_{\alpha\beta}(p)h \quad (t_{\alpha\beta}(p) \in G)$$

である。したがって

$$\varphi_\beta^{-1}(p, h'g) = \varphi_\beta^{-1}(p, (t_{\alpha\beta}(p)h)g) = \varphi_\beta^{-1}(p, t_{\alpha\beta}(p)hg) = \varphi_\beta^{-1} \circ (\varphi_\beta \circ \varphi_\alpha^{-1})(p, hg) = \varphi_\alpha^{-1}(p, hg)$$

が分かり、式 (9.5.1) の右辺は局所自明化の取り方によらない。

◀ は**右作用** 写像 $\rho: G^{\text{op}} \rightarrow \text{Diff } P, g \mapsto (u \mapsto u \triangleleft g)$ が群準同型であることを示す。

- (1) $u \triangleleft 1_G = \varphi_\alpha^{-1}(p, h1_G) = \varphi_\alpha^{-1}(p, h) = u$
- (2) $\forall g_1, g_2 \in G$ をとる。

$$u \triangleleft (g_1g_2) = \varphi_\alpha^{-1}(p, (hg_1)g_2) = \varphi_\alpha^{-1}(p, hg_1) \triangleleft g_2 = (u \triangleleft g_1) \triangleleft g_2$$

◀ は自由

^{*5} つまり、 $p := \pi(u)$, $h := \text{proj}_2 \circ \varphi_\alpha(u)$ と言うことである。

^{*6} 右辺の hg は Lie 群の乗法である。

$\forall \alpha \in \Lambda$ に対して $\forall u = (p, g) \in \pi^{-1}(U_\alpha)$ をとる. $u \triangleleft g' = u$ ならば

$$u \triangleleft g' = \varphi_\alpha^{-1}(p, gg') = u = \varphi_\alpha^{-1}(p, g1_G)$$

が成り立つが, 局所自明化は全単射なので $gg' = g$ が言える. g は任意なので $g' = 1_G$ が分かった.

軌道空間が M

$\forall \alpha \in \Lambda$ に対して, G の右作用 (9.5.1) による $U \times G$ の軌道空間は $(U \times G)/G = U \times \{1_G\} = U$ となる. 故に P 全域に対しては $P/G = B$ となる.

■

定理 9.1:

コンパクト Hausdorff 空間 P と, P に自由に作用しているコンパクト Lie 群 G を与える. この時, 軌道空間への商写像

$$\pi: P \longrightarrow P/G$$

は主束である.

証明

■

構造群を G とするファイバー束 $F \hookrightarrow E \xrightarrow{\pi} M$ が与えられたとき, 命題 9.1 を使うと, 変換関数が共通の主束 $G \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ が存在することがわかる. このようにして得られる主束をファイバー束 $F \hookrightarrow E \xrightarrow{\pi} M$ に同伴する (associated) 主束と呼ぶ.

【例 9.5.1】 フレーム束

変換関数 $\{t_{\alpha\beta}: M \longrightarrow \text{GL}(N, \mathbb{K})\}$ を持つ階数 N のベクトル束 $\mathbb{K}^N \hookrightarrow E \xrightarrow{\pi} M$ に同伴する主束は, 例えば次のようにして構成できる: $\forall x \in M$ に対して

$$P_x := \{ f \in \text{Hom}(\mathbb{K}^N, E_x) \mid \text{同型写像} \}$$

とし,

$$P := \coprod_{x \in M} P_x, \quad \varpi: P \longrightarrow M, \quad (x, f) \longmapsto x$$

と定める. $\text{GL}(N, \mathbb{K}) \hookrightarrow P \xrightarrow{\varpi} M$ に適切な局所自明化を入れて, 変換関数が $\{t_{\alpha\beta}: M \longrightarrow \text{GL}(N, \mathbb{K})\}$ となるような主束を構成する.

$\forall (x, f) \in P_x$ をとる. このとき \mathbb{K}^N の標準基底を e_1, \dots, e_N とすると, $f \in \text{Hom}(\mathbb{K}^N, E_x)$ は E_x の基底 $f(e_1), \dots, f(e_N)$ と同一視される^aことに注意しよう. このことに由来して, $f_\mu := f(e_\mu)$ とおいて $f = (f_1, \dots, f_N) \in P_x$ と表すことにする.

E の局所自明化 $\{\varphi_\alpha: \pi^{-1}(U_\alpha) \longrightarrow U_\alpha \times \mathbb{K}^N\}$ を与える. このとき, n 個の E の局所切断 $s_{\alpha 1}, \dots, s_{\alpha N} \in \Gamma(E|_{U_\alpha})$ を

$$s_{\alpha\mu}(x) := \varphi_\alpha^{-1}(x, e_\mu)$$

と定義すると, $\forall x \in U_\alpha$ に対して $s_{\alpha 1}(x), \dots, s_{\alpha N}(x)$ が E_x の基底となる^b. 故に, \underline{P} の局所切断 $p_\alpha \in \Gamma(P|_{U_\alpha})$ を

$$p_\alpha(x) := \left(x, (s_{\alpha 1}(x), \dots, s_{\alpha N}(x)) \right) \in P_x$$

により定義できる. このとき, $\forall (x, f) = (x, (f_1, \dots, f_N)) \in \varpi^{-1}(U_\alpha)$ に対してある $g \in \mathrm{GL}(N, \mathbb{K})$ が存在して $f = p_\alpha(x)g$ と書ける. ただし g は基底の取り替え行列で, ただ単に行列の積として右から作用している.

ここで, 目当ての \underline{P} の局所自明化を

$$\psi_\alpha: \varpi^{-1}(U_\alpha) \longrightarrow U_\alpha \times \mathrm{GL}(n, \mathbb{K}), (x, f) = (x, p_\alpha(x)g) \longmapsto (x, g)$$

と定義する. 変換関数を計算すると

$$\begin{aligned} \psi_\beta^{-1}(x, g) &= (x, p_\beta(x)g) \\ &= \left(x, (s_{\beta 1}(x), \dots, s_{\beta N}(x))g \right) \\ &= \left(x, (\varphi_\beta^{-1}(x, e_1), \dots, \varphi_\beta^{-1}(x, e_N))g \right) \\ &= \left(x, \left(\varphi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x)e_1), \dots, \varphi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x)e_N) \right)g \right) \end{aligned}$$

となるが, e_μ が標準基底なので

$$t_{\alpha\beta}(x)e_\mu = \begin{bmatrix} t_{\alpha\beta}(x)^1{}_\mu \\ t_{\alpha\beta}(x)^2{}_\mu \\ \vdots \\ t_{\alpha\beta}(x)^n{}_\mu \end{bmatrix} = e_\nu t_{\alpha\beta}(x)^\nu{}_\mu$$

が成り立つこと, およびベクトル束の定義から $\mathrm{proj}_2 \circ \varphi_\alpha|_{E_x}: E_x \longrightarrow \mathbb{K}^N$ が \mathbb{K} -ベクトル空間の同型写像であることに注意すると

$$\begin{aligned} &\left(x, \left(\varphi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x)e_1), \dots, \varphi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x)e_N) \right)g \right) \\ &= \left(x, \left(\varphi_\alpha^{-1}(x, e_\nu) t_{\alpha\beta}(x)^\nu{}_1, \dots, \varphi_\alpha^{-1}(x, e_\nu) t_{\alpha\beta}(x)^\nu{}_N \right)g \right) \\ &= \left(x, \left(\varphi_\alpha^{-1}(x, e_1), \dots, \varphi_\alpha^{-1}(x, e_N) \right) t_{\alpha\beta}(x)g \right) \\ &= \left(x, (s_{\alpha 1}(x), \dots, s_{\alpha N}(x)) t_{\alpha\beta}(x)g \right) \\ &= (x, p_\alpha(x) t_{\alpha\beta}(x)g) \\ &= \psi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x)g) \end{aligned}$$

だとわかり, 目標が達成された. この $\mathrm{GL}(N, \mathbb{K}) \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ のことを**フレーム束**と呼ぶ.

^a 実際 $\forall v = v^\mu e_\mu \in \mathbb{K}^n$ に対して $f(v) = v^\mu f(e_\mu)$ が成り立つので, $f(e_1), \dots, f(e_N) \in E_x$ が指定されれば f が一意に決まる.

^b ベクトル束の定義から $\mathrm{proj}_2 \circ \varphi_\alpha|_{E_x}: E_x \longrightarrow \mathbb{K}^N$ が \mathbb{K} -ベクトル空間の同型写像であるため.

逆に、与えられた主束を素材にして、変換関数を共有するファイバー束を構成することができる。

命題 9.3: Borel 構成

$G \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ を主束とし、Lie 群 G の C^∞ 多様体への左作用 $\blacktriangleright: G \times F \longrightarrow F$ を与える. (9.5.1) で定義された G の P への右作用を $\blacktriangleleft: P \times G \longrightarrow P$ と書く.

- 積多様体 $P \times F$ への G の新しい右作用 $\blacktriangleleft: (P \times F) \times G \longrightarrow P \times F$ を

$$(u, f) \blacktriangleleft g := (u \blacktriangleleft g, g^{-1} \blacktriangleright f)$$

と定義し、この右作用による $P \times F$ の軌道空間を $P \times_G F := (P \times F)/G$ と書く.

- 商写像 $\varpi: P \times F \longrightarrow P \times_G F$, $(u, f) \mapsto (u, f) \blacktriangleleft G$ による $(u, f) \in P \times F$ の像を $u \times_G f \in P \times_G F$ と書く. このとき写像

$$q: P \times_G F \longrightarrow M, u \times_G f \mapsto \pi(u)$$

が well-defined になる.

このとき、 $F \hookrightarrow P \times_G F \xrightarrow{q} M$ は構造群 G をもち、変換関数が $G \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ のそれと同じであるようなファイバー束である.

証明 q の well-definedness は、(9.5.1) で定義した右作用 \blacktriangleleft が $\pi(u)$ を不変に保つので明らか.

主束 $G \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ の開被覆、局所自明化、変換関数をそれぞれ $\{U_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$, $\{\varphi_\lambda: \pi^{-1}(U_\lambda) \longrightarrow U_\lambda \times G\}_{\lambda \in \Lambda}$, $\{t_{\alpha\beta}: M \longrightarrow G\}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$ と書く. また、 $\forall \lambda \in \Lambda$ に対して局所切断 $s_\lambda \in \Gamma(P|_{U_\lambda})$ を

$$s_\lambda: M \longrightarrow \pi^{-1}(U_\lambda), x \mapsto \varphi_\lambda^{-1}(x, 1_G)$$

と定義する.

このとき、 $\forall \lambda \in \Lambda$ に対して C^∞ 写像

$$\psi_\lambda: q^{-1}(U_\lambda) \longrightarrow U_\lambda \times F, s_\lambda(x) \times_G f \mapsto (x, f) \quad (9.5.2)$$

が well-defined な^{*7} 微分同相写像になる^{*8} ので、族

$$\{\psi_\lambda: q^{-1}(U_\lambda) \longrightarrow U_\lambda \times F\}_{\lambda \in \Lambda}$$

^{*7} $\forall u \times_G f \in q^{-1}(U_\lambda)$ をとる. このとき $q(u \times_G f) = \pi(u) \in U_\lambda$ なので $u \in P$ に主束 $G \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ の局所自明化 $\varphi_\lambda: \pi^{-1}(U_\lambda) \longrightarrow U_\lambda \times G$ を作用させることができる. 従って $g(u) := \text{proj}_2 \circ \varphi_\lambda(u) \in G$ とおけば、 G の P への右作用の定義 (9.5.1) から $u = \varphi_\lambda^{-1}(\pi(u), g(u)) = \varphi_\lambda^{-1}(\pi(u), 1_G) \blacktriangleleft g(u) = s_\lambda(\pi(u)) \blacktriangleleft g(u)$ が成り立ち、 $u \times_G f = (s_\lambda(\pi(u)) \blacktriangleleft g(u)) \times_G f = s_\lambda(\pi(u)) \times_G (g(u) \blacktriangleright f)$ と書くことができる. よって ψ_λ の定義 (9.5.2) において $\psi_\lambda(u \times_G f) = (\pi(u), g(u) \blacktriangleright f)$ であり、全ての $q^{-1}(U_\lambda)$ の元の行き先が定義されていることがわかった. 次に $u \times_G f = u' \times_G f' \in q^{-1}(U_\lambda)$ であるとする. このとき右作用 \blacktriangleleft の定義からある $h \in G$ が存在して $u' = \varphi_\lambda^{-1}(\pi(u'), g(u')) = u \blacktriangleleft h = \varphi_\lambda^{-1}(\pi(u), g(u)h)$, $f' = h^{-1} \blacktriangleright f$ が成り立つので、 $\pi(u') = \pi(u)$, $g(u') = g(u)h$, $f' = h^{-1} \blacktriangleright f$ が言える. 従って $\psi_\lambda(u' \times_G f') = (\pi(u'), g(u') \blacktriangleright f') = (\pi(u), (g(u)h) \blacktriangleright (h^{-1} \blacktriangleright f)) = (\pi(u), g(u) \blacktriangleright h \blacktriangleright h^{-1} \blacktriangleright f) = (\pi(u), g(u) \blacktriangleright f) = \psi_\lambda(u \times_G f)$ が成り立ち、 ψ_λ が well-defined であることが示された.

^{*8} $\pi: P \longrightarrow M$, $g := \text{proj}_2 \circ \varphi_\lambda: q^{-1}(U_\lambda) \longrightarrow G$, $\blacktriangleright: G \times F \longrightarrow F$ は全て C^∞ 写像の合成の形をしているので C^∞ 写像であり、 $\psi_\lambda := (\pi \times (\blacktriangleright \circ (g \times \text{id}_F)))$ もこれらの合成として書けている (写像 \times, id_F はもちろん C^∞ 級である) ので C^∞ 写像である. well-definedness の証明と同じ議論で ψ_λ の単射性がわかる. 全射性は定義 (9.5.2) より明らか. 逆写像 $(x, f) \mapsto s_\lambda(x) \times_G f$ も、 C^∞ 写像たちの合成 $q \circ (s_\lambda \times \text{id}_F)$ なので C^∞ 写像である.

を $F \hookrightarrow P \times_G F \xrightarrow{q} M$ の局所自明化にとる．すると $\forall \alpha, \beta \in \Lambda, \forall (x, f) \in (U_\alpha \cap U_\beta) \times F$ に対して

$$\begin{aligned}
\psi_\beta^{-1}(x, f) &= s_\beta(x) \times_G f \\
&= \varphi_\beta^{-1}(x, 1_G) \times_G f \\
&= \varphi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x) 1_G) \times_G f \\
&= \varphi_\alpha^{-1}(x, 1_G t_{\alpha\beta}(x)) \times_G f \\
&= (\varphi_\alpha^{-1}(x, 1_G) \blacktriangleleft t_{\alpha\beta}(x)) \times_G f \\
&= (s_\alpha(x) \blacktriangleleft t_{\alpha\beta}(x)) \times_G f \\
&= \left((s_\alpha(x) \blacktriangleleft t_{\alpha\beta}(x)) \blacktriangleleft t_{\alpha\beta}(x)^{-1} \right) \times_G (t_{\alpha\beta}(x) \blacktriangleright f) \\
&= s_\alpha(x) \times_G (t_{\alpha\beta}(x) \blacktriangleright f) \\
&= \psi_\alpha^{-1}(x, t_{\alpha\beta}(x) \blacktriangleright f)
\end{aligned}$$

が成り立つので $F \hookrightarrow P \times_G F \xrightarrow{q} M$ の変換関数は

$$\{ t_{\alpha\beta}: M \longrightarrow G \}_{\alpha, \beta \in \Lambda}$$

である. ■

【例 9.5.2】 同伴ベクトル束

主束 $G \hookrightarrow P \xrightarrow{\pi} M$ を任意に与える．Lie 群 G の, N 次元 \mathbb{K} ベクトル空間 V への**左作用**とは, Lie 群 G の N 次元表現 $\rho: G \longrightarrow \mathrm{GL}(V)$ のことに他ならない^a．このとき, 命題 9.3 の方法によって構成される階数 N の**ベクトル束**のことを $P \times_\rho V$ と書き, **同伴ベクトル束** (associated vector bundle) と呼ぶ.

^a $\mathrm{End} V$ に標準的な C^∞ 構造を入れて Lie 群と見做したものを $\mathrm{GL}(V)$ と書いた.